

# 村上 しゅら（むらかみ・しゅら）

## 1、プロフィール

昭和 30 年代、全国俳壇に風土性俳句の風が吹き捲いた。風は八戸から起り、その旗頭は村上しゅらであり、その角川俳句賞作品「北辺有情」だった。病を得て潔く筆を折った。

<生没>

1919(大正8)年 10 月3日 ~ 1994(平成6)年8月7日

<代表作>

句集『鶏舞』

<青森との関わり>

黒石町(現黒石市)に生まれる。父、家族と共に八戸市へ移住。『八戸俳句歳時記』刊行。俳人協会青森県支部を結成。

## 2、作家解説

「『苗負ひて女畦ゆく小ささよ』妹は津軽の山奥に嫁いだ。家の裏に峡田があつて、一里ほどもくねくねとつづいている。湧き水が田に入って、田植えがつらいと妹は嘆いた」(自注現代俳句シリーズ『村上しゅら集』より)。北方の風土を懸命に追及して作品としたしゅらの根底には、この句に表われる様な切実な実態が、これを詠わずにはいられないと叫ばせていた。「妹の指は割れて血がいつも滲んでいた」と語っている。北の地方に始めて角川俳句賞をもたらした「北辺有情」はかくして成ったのである。20代の若き指導者加藤憲曠に師事、一日に100句を作ると豪語して「百駒」と号し俳句の道に入ったが、体質的に合ったのか、持前の才気か、ぐんぐん頭角を表わした。後に「しゅら」と改名、修羅の如く俳句にのめり込んで行った。対象は常に生まれ育った北の風土であり、廃れゆくものに光りを当てて詠い上げた鎮魂歌であった。

その当時は未だ古い物、事が生活の中に有った事も幸いであったが、その消えつつあるものにしがみついて作品を成し、日本全俳壇に風土性俳句という言葉がみるみる広がり、俳句総合誌「俳句」では特集を組むなど、各誌競って取り上げるに至った。風土俳句イコール北の貧しさと誤解されたり、八戸俳壇では風土俳句でなければ俳句にあらずという時期もあったが、しゅらはその道を歩んで、角川賞受賞以後も次々と北方俳句を発表、評価を高めて行った。病で自ら筆を折るまで、実行力に富み、八戸俳壇大同団結を画し決行。俳人協会青森県支部の結成発足もその実行力に負う所である。

「鶴」(亡師石田波郷主宰)の盟友小林康二は、主宰誌「林」を刊行するに当り、その俳句の実力と実行力に頼って副主宰として迎え、将来は主宰を譲るという覚悟であったという。惜むらくは病がすべてに終止符を打ってしまった。自力の句集は『鶏舞』一冊である。

### 3、資料紹介

#### ○『鶏舞』

図書

1979(昭和44)年9月1日

185mm×135mm

風土俳句を標榜した著者会心の句集。第5回角川俳句賞受賞作「北辺有情」他を収める。「旅びとの感懐ではなく、その土地に深く根を張って生活しているものの感動」を詠いあげた句集である。